

レッド・ルーレット (その一)

稲宮 健一

表題の単行本を読んだ。副題は「中国の富・権力・腐敗・報復の内幕」である。著者は香港、海外生活を経験した中国人、デズモンド・シヤム（沈棟）で、彼の妻ホイットニー・デュアン（段偉紅、六七年生）が改革開放時代、丁度日本の高度成長期に似た時代にビッグ・プロジェクトを興し、新富裕層に達したが、後に共産党の政治の流と不整合を起し、失踪してしまった内情を書いた。デズモンドは所謂、赤い貴族の出身ではない。ホイットニーは山東省の地方役人の家の出で南京理工大学でコンピュータ・サイエンスを学び、また優れた文章力を持っていた。二人は二〇〇二年カナダのバンフ国立公園に旅行、さらに結婚へたどり着く。北京で行った披露宴で、ホイットニーが一人のご婦人を丁重にもてなしている姿を覚えている。後から、この夫人は温家宝の妻、張培莉（張おばさん、四一年生）であると知らされた。そして、ホイットニーは張おばさんとのコネの後ろ盾を得て、大企業主となり新富裕層の仲間入りを果たした。

温家宝は学生時代、地質学を専攻し、張おばさんと共通の分野の縁で結ばれた。後政治の世界に入り、党の総務と言える中央弁公庁で胡耀邦、趙紫陽、江沢民に仕えた。張おばさんは最初、地質学と縁のある宝石の国有企業を興し、大きな取引に手を付けた。しかし、温家宝家内部で企業活動を行うことになると、夫の政治活動に支障が生ずることがあり得るので、張おばさんは商売に直接関わらず、その役をホイットニーが担った。

温家宝が現役だった八九年に天安門事件があり、自由化を求めるデモを実力で鎮圧された。彼の上司である自由な国に理解をもった趙紫陽は失脚し、同様な考え方持つ数千人の官僚が検挙されたが、温家宝は自らこの考えを行動に移すことなく現職に専念して、総理へと登り詰めた。職務以外は張おばさんに任せきりだった。そしてホイットニーは張おばさんを通じて改革開放路線を真つすぐ進んだ。

「コネ」は中国語で関係（guanxi）というが、権力者との繋がりを言う。単なる顔見知りの意味ではない。